

## 保育の質の向上に向けての援助方法 —「クラスだより」を通して子ども理解につながるかかわりの視点を探る—

大木直枝

### I. はじめに

平成29年度の保育所保育指針等の改定で、「資質・能力」の考え方や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の考え方が示された。幼児教育における保育者の役割は「環境を通じた保育」によって、子ども達が「感じる・探る・気づくようになる・できるようになる」という主体的な経験を重ね、それを土台として「探求する・繰り返し試す」といった、自ら積極的に取り組む姿へとつながるよう援助することだと考える。そこには、子ども一人一人の育ちを受け止め、記録として残していくことも保育者の役割の一つでもあると考えたときに、日々の子どもの様子から自分自身の保育を振り返り、見直すことが必要となる。保育士が、年間指導計画、月週案、日案において、日々の子どもの姿から計画を立案し、実行、評価反省をしていく中で、園長が指導にあたっている。特に月の指導計画（以下、月案とする）に記載される子どもの姿と毎月発行されるクラスだよりの子どもの活動の様子とリンクするところが多くあること、またそこには園の理念や方針、保育者の考えを伝えていく手段であることから、月のねらいやそれに関連した子どもの姿、保育者の思いを関連して記載していくよう心掛けて作成するよう指導してきた。この指導による保育士の変化についてまとめていくことで、こうした指導の有効性を示せるのではないかと考えた。

クラスだよりを研究対象に出されている論文においては保護者支援について分析等がされていることが多いが、その中でクラスだよりの持つ1つの意味として「子ども達の様々な姿や保育者の思いなどを保育の中での姿を通して伝えることで、親としての成長を助けていくことが重要となる。」（柴崎、会森2016）とあるように、保護者支援を通し保育者自身の振り返りに繋がっているとも考えられる。

そこで、園において毎月発行される『クラスだより』に焦点を当て、その月の指導計画のねらいとの関連を踏まえながら、作成できるようにアドバイスや助言を行った。この指導によって、保育者がPDCAを繰り返しながら、保育の可視化・文章化する力を持つことができるのではないかと考えた。また、この指導を通して、保育者自身の考えや保育への取り組み・子どもとのかかわりを見直せるのではないかと考えた。

## II. 研究方法

### 1. 研究協力者

私立保育所に勤務して3年目の女性保育者で、A保育士とした。調査開始当時23歳であった。

### 2. 指導期間

2018年4月から2020年3月の4歳児クラスを受け持った2年間を分析対象期間とした。

### 3. 指導方法

2年間のクラスだよりと月案を比較しながら、園長である筆者が指導を行った。クラスだよりにおける子どもの姿の内容に注目し、保育者が子どもをどのように捉えているのか、の指標とした。その課題を指摘しつつ、指導計画のねらいの意味やねらいに基づく保育のあり方、子どもの姿の視点について指導した。二人担任だったため、クラスだよりの作成と指導計画の作成は隔月で交代することとなっていた。

### 4. 指導の対象

4歳児クラスの担任として、1年目はA保育士と4歳児担任経験がある男性保育士のB保育士と、2年目はA保育士と保育経験はB保育士と同じであるが、幼児クラス担任が初めてのC保育士がそれぞれ2人で受け持った。B保育士は、物事をどちらかというとな否定的に捉えていくことが多く、保育について一人で考えてしまうことでA保育士との間で共通理解を深めていくことが難しかったように感じる。反面C保育士においては幼児担当が初めてということと、慎重な性格もあり、常にA保育士と話し合いを行い、やや依存する気持ちで年度当初スタートしていた。消極的で受け身に回ってしまいがちなA保育士であるが、保育感や個性の異なるパートナーと、1年目2年目での子どもの姿にも違いを感じながら2年間4歳児クラスで保育を行い、徐々に保育を進めていくことへの意欲が深まり始めていたA保育士に着目し指導していくこととした。

### 5. 分析方法

クラスだよりに記載された子どもの様子と月のねらいとの関連を見直し、子どもの姿の捉え方を中心とした保育者の変化について分析した。

### 6. 倫理的配慮

研究協力者及び、所属先の責任者及び園長に研究についての説明をし、研究で得られたデータにより個人・機関名が特定されないことがないこと、本研究により得られた個人情報は本研究の目的以外では使用しないこと、この研究により得られたデータ等は公表後に破棄することについて、承諾を得た。

### Ⅲ. 結果および考察

2年間の指導を通して、A保育士の変化は4期に分けられた。1期「期待と不安が入り混じっている時期」、2期「自分の保育の方向が見え始めた時期」、3期「少しゆとりが見られるようになった時期」、4期「自信と不安の中でゆらぎの時期」とした。以下にそれぞれの内容について、クラスだよりの子どもの姿及び月案の内容、指導の視点についてまとめた。

#### 1. 指導開始年度の変化について

4歳児クラスの担任となり、2人で受け持つこととなった。A保育士は3歳児の担任からの持ちあがりであり、パートナーのB保育士は1年先輩にあたる男性保育士であった。月案、クラスだよりは月によって、どちらかを担当する交代制であり、この年度においては相手の反省を受けてクラスだよりを作成する流れになっていた。

##### (1) 1期「期待と不安が入り混じっている時期」

表1に、この時期のクラスだよりの子どもの姿の内容、月案との比較および筆者の指導のポイントをまとめた。

子どもの姿を客観的に捉えることが難しく、月案との繋がりもまだ希薄であった。ねらいに伴う保育者自身の具体的な保育の手立ても考えられないことが多かった。

表1 期待と不安が入り混じっている時期のクラスだよりおよび月案のまとめ

月	文面から	月案との比較	指導のポイント
4月	子どもの姿から【「やってみよう！」という気持ちを大切にしながら保育士や友達と一緒に様々なことにチャレンジしていきたいです。】【言葉掛けや働き掛けしていこうと思います。】 <sup>1)</sup> という目安を示しているようではあるが、子どもが自ら行うような言い回しとなっていて、保育士の思いやねらいからずれてしまっている。	パートナーの立案であるが、子どもの姿の捉えは類似している。	年度当初ということもあり、文章自体に大きな手直しはせず、ねらいを意識していくよう言葉をかけていく。
6月	今現在の子どもの姿を抑えていくことはできているが、そこに保育士のかかわりと今の姿を受けてどこに繋げていこうとしているのかが見られない。また、子どもの活動への予測と方向性がつかめていない。運動会に向けての場面では特に【ポンポンを持って動くことも難しかった子ども達でしたが、今では堂々とした踊りを見せてくれています。・・・可愛いみどり組さんの姿・・・子どもの気持ちを盛り上げていきたいと思います。】とどのように保育士が関わり、子ども達の気持ちを高めていくのかという方法の記載が見られなかった。 全体に子ども理解がされていないことが保育士自身の方向性がつかめないことに関連してしまっている。	前月の子どもの姿、ねらいを抑えて、書かれているが、当月における大きな行事である運動会についての抑えと自身の反省があまり重点となっていないことで次月に活かされていない。	ねらいを意識していくように言葉をかけていくとともに、子どものトラブルに意識が向いてしまっていたので、保育士がどうかかわっていったのかを具体的に書いていくように指導する。運動会についても同様。
8月	子どもの興味について関心を向け、【一緒に夏の虫やアサガオの世話などをしながら新しい発見を楽しむ、虫や植物の生長に興味・関心をより深めていけるようにしていきたいと思います。】とあるが、その前の文章では子どもが自ら関わって発した言葉を受けてはいるものの、保育士からの仕掛けの言葉がけが出てこず、子どもに先導されている。文章としては、「子どもと一緒に～しながら、～していくようにしていきたい」とねらいに繋がる文章が見られるようになる。	ねらいを意識して書いていくことで、月案の反省においても次月につなげていけるよう意識していく様子が見られた。	保育をしているものの思いがどこなのかがわかるように書くことで、保護者との会話につながるということと、親子の会話の手掛かりにもなり、理解してもらいやすいことを伝える。

1) クラスだよりの中で使用された文章は【】で囲った。

保育士自身がまず子どもとのかかわりを通して保育を楽しめるように、また、楽しんでいる様子が日常の保育の中で少しでも見られたときは、言葉をかけ本人が意識できるように援助していった。週の反省の中で、少しずつではあるが保育の方向性や思いなどが見られるようになってきている。保育士自身が自信を持って子どもと向き合っていくことに気付いていけるよう、引き続き「子どもにどうかかわり、どうして行きたいのか」を繰り返しクラスだよりの作成時には伝えて、保育士自身から「～のねらいで～ということから出ています」という応答が聞かれるような働き掛けを続けていく。

## (2) II期「自分の保育の方向が見え始めた時期」

表2にこの時期のクラスだよりと月案，その月の指導のポイントをまとめた。子どもの姿を捉える視点が変わってきて，できる，できないといった画一的な見方に変化が出てきた。それが少しずつ月案の内容にも反映されてきた時期であった。

表2 自分の保育の方向が見え始めた時期のクラスだよりおよび月案のまとめ

月	文面から	月案との比較	指導のポイント
10月	子どもへ声掛けをする文脈が多くなり，例えば【鉄棒で「先生，おてつだいでして」と逆上がりに挑戦し，保育士が「あとちょっとだね！」「さっきより足が上がってるよ」と声をかけると「もう一回やりたい」と何度もトライしている姿が見られます。】など，自身の関わりや成長を受け止め，子どもの意欲に繋げていこうとする保育士の思いがみられる。保育士の変化を受けて子どもも少しずつではあるが変化してきていることが窺える。大きな変化として「できる」という結果を捉えることが多かったのが，「やろうとする」という過程に気付き受け止めていくようになった。	季節へのかかわりが思うようにできなかった反省を受けて，今月のねらいとし，活動を意識して書いている。遊びの面では鉄棒にポイントを絞り取り組みの様子を知らせながら，子どもの成長を知らせ共有している。自身の反省ではねらいを少しではあるが意識して書けていた。	保育者自身が初めて経験する運動会に比重が大きくなってしまふところがあり，子ども達の日頃の変化を見落としてしまうことのないように，言葉をかけ，気づきを促すようにしていった。片づけの場面を読み，書こうとした理由を聞き，保育士の思いをくみ取りながら助言する。
12月	遊びの場面の紹介で【子ども達から「鬼ごっこやってからお部屋に入る！」「だるまさんころんだがしたい！」との声が上がることが多くなりました。】という子どもの声を受け止めて遊びを進めている流れや，遊びの中で保育士とのかかわりで見られた子どもの表情を知らせていきながら，集団遊びの中で，保育士自身がしっかり活動の中に入り，子どもとの関係を深めている様子が窺えるが，ねらい等がそこからは見えにくい。また，11月の活動の中心となっている生活発表会に向けての取り組みの様子があまり注視されておらず，【練習を心待ちにしています。】という表現で終わり，子どもの成長に向けた関わりやねらいの持つ意図に関して，他人事として受け止めているような表現が目立った。	前月の反省を受けて，発表会に向けての紹介をしているが，それだけに留まってしまっている。自身の反省においても，取り組みの様子や子ども達の成長を受け止めていくよりもマイナス面にピントをもっていつてしまっている。活動の中に入っていないように伺える。	保育者がどの方向に子ども達を動かし，興味や関心をもたせていきたいのかをもう一度，クラスで話し合うことの大切さを話し，文章を書いていくよう助言する。なかなか自分の思いが出せないことも踏まえ，クラスだよりとしては了解する。

<p>2月</p>	<p>前月の活動からのつながりから、チューリップの生長への興味や進級に向けての気持ちの高まりなど子どもの気持ちを受け止めているようだが、【～しながら生長を楽しんでいる様子が見られます。また、暖かい日には、散歩に出かけて冬の自然にたくさん触れていきたいと思います。】と、どの方向に子ども達をもっていけばよいのか深く入り込めない面が見られる。文字遊びについては、【日頃の遊びの中で文字に触れる機会をつくっていき、より文字に興味を持ち親しんでいけるようにしていきたい】など、実際に関わりながら行っていることで、どうして行きたいかという方向がしっかり感じられる。</p>	<p>子どもの活動や成長の中で、マイナス面に目を向けていたことに保育参観を通し、保護者との会話から気付かされることがあったよう で反省に振り返りがある。子ども理解を深め、成長や意欲へとつなげていくことをどうすべきかを考える機会となった。</p>	<p>保育者が子ども達に何を体験させたいのか、今やっている活動や関わりがどこにつながるのかを見直しをもっていかなければ、やりっぱなしになってしまう、ということを伝える。自身がやっている保育を楽しみながら子どもを真ん中にして考えていくようにしてほしいことを伝える。</p>
-----------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

一年を通して、ねらいを意識していくこと、自分の近くにいる子どもにまずピントを当て、自分自身が“おもしろい”と思えたことをピックアップして書いていくことから始めることを繰り返し伝えていった。また、「～という姿が見られたので」、「～へとつなげ」、「～となっていくようにしたい」「～しているときに～と声をかけたり、援助をしたりしたこと、子どもが～に変わり」など、自分がどう関わってきたことで子どもがどう変化していったのかを知らせていくことも大切である、ということを繰り返し機会を見ては話していった。

上記のことに重点を置き、援助してきたが、A保育士が初めての4歳児クラス担任として、見直しをもって子どもと関わることに對して深く理解していなかったこと、B保育士との連携がうまく噛みあわず、取り組みが後手にまわってしまうことが多くなっていたこともあり、前半は自分に余裕や自信が持てなかったことが感じられた。先輩の保育者への遠慮もあり、なかなか自分らしさを出せていなかったが、大きな行事を経験したり、子どもの成長を感じ取れるようになってきたりしたころから徐々にクラスだよりの文面において、子どもとの距離感が近くなってきたことを感じられるようになっていく。まだ自分がしたい（やってみたい）保育の方向性が定まっていなかったことで、行事や周囲からの意見に右往左往して、方向性を見失ってしまうところがある。一年間の経験で得た成功や失敗体験を糧にしていくためにも自身でしっかり自己評価をし、PDCAを繰り返していくことを助言していく。

## 2. 2年目の変化について

4歳児をC保育士と二人で受け持った。1年先輩のC保育士がパートナーであるが、C保育士は初めての4歳児担当であった。お互いに初めて受け持つ子どもとのかかわりであった。前月の自身の反省を踏まえて次月のクラスだよりを作成するという流れで前年同様に交代制で作成した。

### (1) Ⅲ期「少しゆとりが見られるようになった時期」

表3にこの時期のクラスだよりと月案、指導のまとめを示した。この時期はこども一人一人の個性や良いところを認め、次へのねらいへと繋げることが可能になってきた時期であった。それをより月案に繋げられるように指導していった。

表3 少しゆとりが見られるようになった時期のクラスだよりおよび月案のまとめ

月	文面から	月案との比較	指導のポイント
5月	月案のねらいと反省を受けて環境へのつながりと進級した喜びや意欲を見せる子ども達の姿を捉え、【〇〇組さんだもんね】「△△組さんに格好良いお手本みせれるかな？」と声を掛けると、子ども達は歯磨きをしっかりやって見せたり、友だちの後ろに並んで…】など、そこから身の回りの事へとつなげていこうとする保育士の意図が伺える。制作の場面においても説明が多くあるものの、過程とその後の子どもの満足感は描かれている。	ねらいを意識して子どもの様子が書かれていることで、何を伝えたいのかはわかりやすくなっている。しかし、見通しという点ではまだ持っていないため、活動が月案に記載されていないことに気付いていない。本来であれば赤字等で訂正、追加が必要であった。	昨年に引き続いて4歳児の担当で、活動等においては少しゆとりがあるため、文章化するポイントがわかり、読んでいても伝わりやすくなっていた。信頼関係を築くうえでも自分から積極的に子どもに関わり理解していこうとする姿勢がみられるので、必要に応じて助言していく。
7月	【今〇〇組では“お片付けチャンピオン大会”を開催しています。】と、生活や遊びの中で必要なルールなどに重点を置いている保育士の意図を保護者に知らせることを意識しながら、書いている様子はくみ取れる。また、子どもの良い面を受け止めながらも「こうしていきたい」という保育士の思いを表現する場面が見られる。	クラスだよりを書くことにより、評価反省において自身の子どもへの配慮や担任間での連携などに気付くきっかけとなったように感じる。ねらいから内容へのつながりも少しではあるが見通しを持ったものになっている。	保育士自身が何を狙って活動しているのかが、保育の中や日常の会話の中で見えていたので、文章を読んで子どもとの関係がつかみやすくなり、ポイントを確認しながら助言していくようにした。

<p>9月</p>	<p>戸外遊びの「蟬取り」での一場面を通して、【もう少しのところで逃げられてしまった保育士に「もう少し早く網でとればよかったんじゃない？」と優しくアドバイスをしてくれる一面が見られ、その姿に子ども達の成長を感じました。今後も…して子ども達の興味を伸ばしていければと思います。】という、保育士と子どもとのやりとりの中に少しずつ信頼関係の深まりが感じられ、子どもからの言葉を受けて成長やこれからつなげていこうとするねらいへと文章が結ばれており、少しではあるが自分の保育を楽しみ始めているように見られる。</p> <p>プール遊びやボディペインティングも同様に「～する姿が見られこれを～につなげていきたい」と見通しを持つ言葉につながっている。</p>	<p>子どもの姿の捉えが以前に比べ、前月のねらいを念頭に置いているような内容になり、次のねらいに梅なるポイントがわかりやすくなっている。</p> <p>評価反省においても前回同様に見通しを持つ文章が出てきている。</p>	<p>子どもが経験して自信となったことを次月にある運動会という大きな目標につなげていくことを意識していくように助言する。担任間での話し合いをしっかりと持ってねらいや活動を考えて月案を組み立てていくことを再度確認する。</p>
-----------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

年度当初は、4歳児が2年目であること、またパートナーが初めての4歳児であることもあって、A保育士がリードしていく役割を自覚しながら保育を進めていっている様子が窺えた。子ども達に対しても積極的にかかわっていく中で、一人一人の個性を感じながら対応し、信頼関係を築いていく姿勢が見られた。担任間においても、話し合いを密に持ち、意思疎通を図っていこうとする意識は感じられたが、4歳児という子どもの成長や発達をどう捉えて、どの方向にクラスとして向いていこうとしているのかの迷いが月案の反省やねらいの持っていく方に窺えた。A保育士の成長や保育への意欲がみられるようになってきたことに対しては、折を見て本人にも伝えていく。また、保育所保育指針「第1章第3項(3)指導計画の展開 イ子どもが行う具体的な活動は、生活の中で様々に変化することに留意して、子どもが望ましい方向に向かって自ら活動を展開できるよう必要な援助をおこなうこと。」<sup>2)</sup>という記載を基に、その時々の子どもの姿に即して気づきや感動を尊重したり、子どもの発想を刺激するような言葉を添えたりするなどして豊かな体験が得られるよう援助をすることが重要であること。そのためにも柔軟な対応をすることが大切であることを一緒に確認し、保育の方向性を見出す援助をしていく。

## (2) IV期「自信と不安の中でゆらぎの時期」

表4にこの時期のクラスだよりと月案、指導のポイントのまとめを示した。子どもの気持ちを受け止めつつねらいを定めて行事や活動への取組を決めていたが、月案でははっきりと文章化できていない部分もあった。

2) 『保育所保育指針(平成29年告示)』フレーベル館、2017年、9ページ。

表4 自信と不安の中でゆらぎの時期のクラスだよりおよび月案のまとめ

月	文面から	月案との比較	指導のポイント
11月	生活発表会に向けて、取り組みを進めている様子が書かれているが、運動会に取り組む様子と比べ具体性に欠けるように感じる。【読み聞かせをしたり、ペープサートにしたりして楽しんでいます。今後は子ども達と一緒に考えながら発表会の劇につなげていきたいと思っています。】と、見通しや方向については示されているが前月のねらいにあるごっこ遊びについてのおさえがなく、行事の為の取り組みを知らせていることになる。	前月のねらいから「ごっこ遊びをする中で…イメージを伝え合う」とあるので、個々を意識して、発表会に向けてどう取り組んでいるのか文章化することができていない。活動としては行っていたので、残念である。	ごっこ遊びを意識していくように助言していなかったことを反省する。 A保育士が少し迷いが出てきている部分をしっかり押さえていくべきであった。
1月	年末年始休みがあつての子どもの様子が中心となって、前月の活動も正月遊びにつながる事柄が多くスペースを持っている。正月遊びから子ども達に経験させたい事柄においてもどのようにしてと言うことは無く、【正月遊びを楽しみながら…ルールを守って遊ぶことの楽しさを味わえるようにしていきたい】と、次月にねらいを意識した文面となっている。	生活発表会という大きな行事への取り組みについての自身の反省がないことで、クラスだよりへ反映されず子どもの成長やこれからへの取り組みに具体的な分が見られなかったのではと思う。	行事を経験した子どもの捉え方や自身の取り組み方についての思いがパートナーと少しずれが出てきているところもあり、年度当初に感じた責任感から昨年度のような依存心に変わってきているように感じる。発表会については具体的にという言葉をかけている。
3月	年長組になる期待を持って過ごす子どもの姿とその気持ちを受け止め、より期待を高め進級への不安が和らぐようなかわりの様子が書かれている。一年間をどう見通しをもって子どもに関わり、理解しつなげていきたいかというA保育士の思いが少しほんやりとしてしまったように感じる。特に、前月で年長とのかかわりを持った活動を深めていただけに、その様子が書かれていないことに具体性が欠けてしまった。	進級に向けてねらいを考えていく2月、3月のまとめの時期。子ども達の経験を振り返り年長組になるまでに進めていかなければならないことが、しっかりと抑えられていないように感じる。連携を取りながらねらいを決めているが、気持ちのズレが出ている。	ねらい等については、子どもの姿や活動、例年の流れなどを踏まえて、見直しを進めていった。文章については、A保育士の思いを尊重しつつ、最後のまとめをどのようにしていきたいかを話し合いました。

年度当初パートナーに対して積極的に言葉をかけ、話し合いながら進めていくことが多く、子ども達への言葉がけにも昨年にはあまり見られなかったメリハリのある言葉が多く聞かれ、思いを受け止めて認めていくことや、指導するときなどA保育士自身に言葉や思いで伝えていこうとする様子が見られた。担任間の連携もスムーズに行われ、同じ方向をみて保育を進めていた感があった。少しずつ自分のしたい保育を持ってきているようでもあり、「文章化する」ことにどこを抑えて書いていこうという意識も深まってきてはいる。

しかし、相手との関係が良くなってくるにつれ、依存する気持ちも出てきて、スッと裏方に回ってしまう性格が出てしまっていた。

#### IV. まとめ

A保育士に着目し、クラスだより及び、月案の指導を通して、保育士自身の考えや保育への取り組み、子どもとのかかわりが良い方向へと変わるのか、また保育の可視化、文章化していく能力の育成を試みた。上記で見えてきたように、2年間で、A保育士の子どもの見方が変化し、それに基づく保育の計画のねらいや具体的な手立てを考えられるようになった。しかし、保育の可視化や文章化にはまだ課題が残った。これについては、さらに継続的に指導していく必要があるだろう。

2年間を通し、A保育士を見てきて感じたことは、どこのポイントでその保育者の特性や意欲を自信へとつなげていくか、また、必要な言葉がけとはなんであるのかを改めて考えさせられた。この点についても今後の課題である。

また、1年目でパートナーを組んだB保育士は次年度年長へ持ち上がり、先輩保育士とのクラス運営の中で、より刺激を受け改めて子どもの育ちや理解を深めていく機会を持ち、試行錯誤しながらも前年度に比べ少しではあるが、子どもに対する関わりや言葉がけに肯定的な面が増えてきていた。C保育士においては、1年間を通して子どもの成長や保護者との信頼関係の深まりを感じることで、少しではあるが保育という仕事についての面白さを感じ始めてきている様子が窺え、5歳児クラスへ担任を持ちあがることへの意欲を見せていた。しかし、やはりA保育士同様、繰り返しの指導は必要であると感じる。

クラスだよりと月案は、一般的に園では作成されている書類のため、新たな書類作成の手間は必要ない。今回の取組の視点を意識的に取り入れながら指導していくことで、保育者の子どもの視点が変化したり、ねらいや保育の手立てを見直したりすることにつながりやすい。そして、保育者の変化は、そのまま保育の質の向上につながると期待できるだろう。

## 参考文献

- 今井和子『遊びこそ豊かな学び』ひとなる書房, 2013年.
- 大豆生田敬友「思いを伝える情報発信で保護者と「つながる」園をつくる」『これからの幼児教育2011』ベネッセ教育総合研究所, 2011年, 2-5ページ.  
[https://berd.benesse.jp/up\\_images/magazine/koreyou\\_2011\\_summer\\_all.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/koreyou_2011_summer_all.pdf)  
(アクセス日2021年11月26日)
- 河邊貴子「「驚き」や「喜び」を記録し、子どもの育ちを読み取って次の援助につなげる」『これからの幼児教育2019』ベネッセ教育総合研究所, 2019年, 2-5ページ.  
[https://berd.benesse.jp/up\\_images/magazine/KORE\\_2019\\_spring\\_all.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/KORE_2019_spring_all.pdf)  
(アクセス日2021年11月26日)
- 鯨岡 峻 鯨岡和子『保育のためのエピソード記述入門』ミネルヴァ書房, 2009年.
- 汐見稔幸『こども・保育・人間』学研, 2018年.
- 柴崎正行編著『改訂版 保育方法の基礎』わかば社, 2018年.
- 柴崎正行 会森恵美「保育所に於ける保護者支援についての検討: 「クラスだより」の分析を通して」『大妻女子大学家政系研究紀要』2016年, 157-162ページ.  
<http://id.nii.ac.jp/1114/00006351> (アクセス日2021年11月26日)
- 全国保育士会編『改定 保育所保育指針・解説を読む』全国社会福祉協議会, 2018年.
- 那須信樹・矢藤誠慈郎・野中千都・瀧川光治・平山隆浩・北野幸子『手がるに園内研修メイキング みんなでつくる保育の力』わかば社, 2016年.